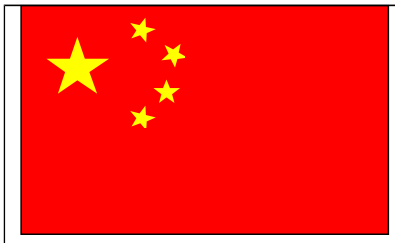


中華人民共和国　　派遣期間　２０１４年4月～２０１７年3月

# 蘇州日本人学校　実践報告

～蘇州・中国での３年間を振り返って～

苫小牧市立沼ノ端小学校
教諭　　浜口　岳彦

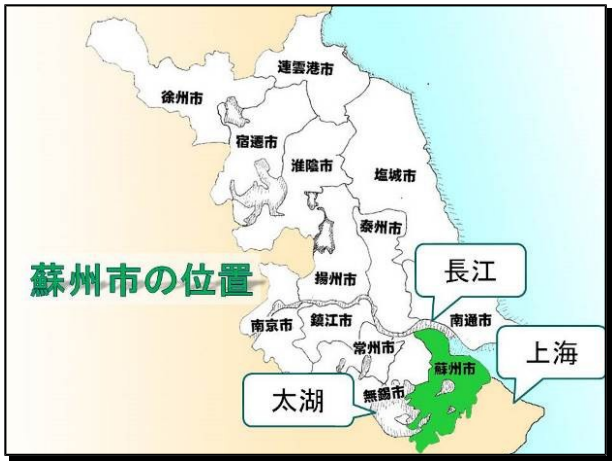
## 1　蘇州の概要

(ア) 位置

蘇州日本人学校のある蘇州市は，中国の南東部にある江蘇省に属しており，東は上海，南は浙江省，西は太湖，北は長江に接している。

江蘇省には，省都南京を始め，李白の詩「黄鶴楼送孟浩然之広陵」で有名な揚州市（当時の揚州とは少し異なるが），焼き物で有名な宜興市のある発展著しい無錫市や，徐州市，鎮江市などの歴史都市，新興都市の南通市などがある。司馬遷の「史記」や三国志にも登場する歴史ある地域である一方で，省内総生産では広東省に次ぐ国内２位を誇り，経済発展の著しい省でもある。

江蘇省の面積は 102,658km$^2$ で，北海道よりも２割ほど広い。江蘇省の南端である蘇州市から北端である徐州市までは，新幹線（高鉄）で２時間半ほど。




(イ) 歴史

蘇州の歴史は古く，紀元前 514 年，今から約 2500 年前の春秋時代に，「呉」の国の都として蘇州城が建てられた。『臥薪嘗胆』などの故事で有名な，呉越の争いにまつわる旧蹟が今も各地に残っている。風光明媚で交易が盛んな蘇州は，『東洋のヴェニス』とも呼ばれてきた。市内に残るいくつもの庭園は，宋，元，明，清，各王朝の建築の様式を伝え，そのいくつかは世界遺産に指定されている。

呉王・闔閭が埋葬されているとされる虎丘

運河と古い街並み

世界遺産の庭園「獅子林」

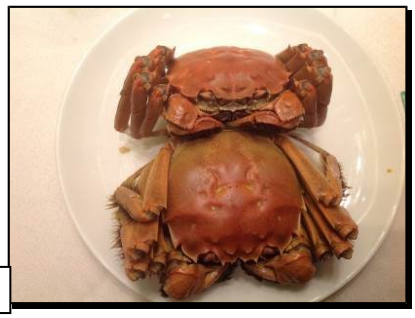
(ウ) 蘇州の名物

「蘇州」と言えば，日本人にとっては「蘇州夜曲」くらいでしか耳馴染みがないか

もしれないが，それ以外にも有名な物はある。最も名の知られた名物は，「上海蟹」であろう。「上海蟹」とは日本の言い方で，中国では「大闸蟹」と呼ばれ，実際には上海ではなく，蘇州市内の陽澄湖でとれる。

上海蟹の水揚げ（陽澄湖）

陽澄湖のそばにはカニ料理店が並ぶ



蘇州市が東岸に接している太湖は，面積 2,250km$^2$ と琵琶湖の３倍以上の面積を誇る大きな湖である。蘇州市，無錫市など数か所から遊覧船も運航されている観光地である。真珠が名産で，アクセサリーだけでなく，真珠を使った化粧品などが売られているのもよく見かける。

蘇州を始め，上海，無錫などの江南料理は，甘い味付けが特徴的である。蘇州の名物料理「松鼠桂魚」や「蘇州面（麺）」は，中国人の中でも「甘くてびっくりする」と語られるのは，「蘇州あるある」の一つである。

それ以外にも，蘇州の名産品としては刺繍が名高い。また，戦前は日本の租界地があったり，古くは空海が修行に訪れたりと，日本にゆかりのあるまちでもある。

松鼠桂魚

蘇州面（麺）

蘇州刺繍の作品

(エ) 日本人学校の立地

蘇州日本人学校は，蘇州の経済発展の一翼を担う蘇州高新区，通称「新区」に位置している。新区には，マンション群が建ち並び，日系企業の駐在員が多く住むとともに，スーパー，デパートなどの商業施設も増え続けている。

日本人学校の目の前にある淮海街，通称「商業街」には，日本料理の店が多く並び，毎晩多くの日本人で賑わっている。また，学校の隣にある大型スーパーには，食品や日用品だけでなく，衣料品，薬品類，電化製品なども売られている。日本人が住むマンションの周辺には，日本人向けのスーパーも数店あり日本人の多くはそこで買い物をする。近年では，日系の大型ショッピングモールが蘇州市内に３店舗オープンし，その中には日本でもなじみのある衣料品店や価格均一店，家具店ファストフードも入っている。このほかにも，学校周辺には，レストラン，小売店，コンビニ，ホテルなどが多く集まっており，とても

淮海街：通称「商業街」

便利な地域である。

(オ)蘇州の企業

蘇州には，自動車などの製造業を中心に，数多くの日本企業が進出している。従来は製造業中心であったが，今では大型小売店，保険会社，旅行代理店など，進出企業の多様化も進んでいる。

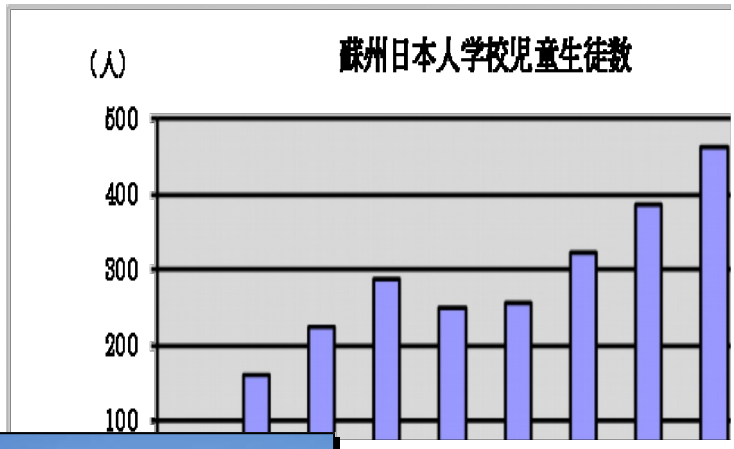
一方で，コスト面で有利な東南アジア諸国への企業進出が進む中，PM2.5 の問題や日本国内での中国のイメージ悪化等を背景として，日本人駐在員の数に大きく変化はないものの，家族を帯同する駐在員は年々減少してきている。それに伴い日本人学校の児童生徒数も，2013 年にピークを迎えて以降は，毎年微減を続けている。今後も，駐在員に対する規制強化が始まるなど，企業にとっては厳しい状況が続くことが予想される。

## 2　蘇州日本人学校の紹介

(ア)学校の概要

蘇州日本人学校は，蘇州日商倶楽部が設立母体であり，日本政府の補助を受けて運営している，私立の学校である。日本国内の学校と同様に，小学校・中学校学習指導要領に基づいたカリキュラムを実施している。学校教育目標「未来に向かい明るく元気で心豊かな子どもの育成」の実現に向け，日々の教育活動を進めている

蘇州日本人学校は，日本人学校としては中規模の学校である。学校の設立は 2005 年で，私の赴任中に１０周年を迎えた。児童生徒数は，当初は右上がりに急増していたが，2013 年を境に減少に転じている。ここ数年の学級数は，各学年１から２学級で推移している。小学部６学年，中学部３学年の計９学年が，日々，共に活動している。




(イ)施設・設備

総敷地面積は 27652.7㎡で，蘇州高新区管理委員会より賃借して運営している。校舎には，通常の教室，特別教室が，合わせて３０以上ある。また，吹き抜けのスペースや中庭などがあり，上部からも光を取り込んでいるため，大変明るく，開放的な雰囲気である。

日本人学校の校舎

吹き抜け空間「みらいホール」

電子黒板を活用した授業

蘇州日本人学校は，ICT 機器の充実に力を入れている。各教室には，インターネット接続の可能なコンピュータと電子黒板が設置され，授業だけでなく児童生徒の視覚に訴える，より効果的な教育活動を行うために，多様な場面で活用されている。そのほか，PC 室には，１学級分のコンピュ

ータが設置されている。また，各学級で使用可能なタブレット端末も６台あり，調べ学習や実技教科等で活用されている。

校庭には全天候型の人工芝が敷かれ，運動のしやすい環境が整えられている。また，タータンでできた100mコース，硬質ゴム面で覆われたバスケットコートやテニスコート，遊具などの設備も充実しており，体育の授業だけでなく，部活動，クラブ活動，休み時間等に有効に活用されている。

(ウ)年間行事

| | |
|---|---|
| ４月 | １年生を迎える会（小・中）　参観日 |
| ５月 | 修学旅行（中３）　宿泊体験学習（中１・２） |
| ６月 | 運動会 |
| ７月 | 個人懇談会 |
| ８月 | |
| ９月 | 蘇州っ子フェスティバル　学校公開週間　蘇州・中国文化体験 |
| １０月 | 遠足（小１～４）　修学旅行（小６）　宿泊体験学習（小５） |
| １１月 | 学習発表会　現地校交流 |
| １２月 | かけ足大会　個人懇談会 |
| １月 | |
| ２月 | ６・３年生を送る会（小・中）　参観日 |
| ３月 | 卒業式 |

(エ)在籍児童生徒の国籍・言語環境

蘇州日本人学校には，多種多様な児童生徒が在籍している。

１　日系企業駐在員家庭・両親共に日本人の子

圧倒的に多いのが，このケースである。学年にもよるが，どの学年も６～９割はこのケースであったのではないかと思う。「中国語はほぼ初心者」「母親は，中国では専業主婦」「日本人向けのマンション住まい」「３～５年で帰国する」等の特徴を持つ家庭が多い。中国語は，日本人学校で一から学ぶことになる子が多いが，中には入学前に現地系の幼稚園に通っていたり，中国語の家庭教師に教わったりして，ネイティブ並みに聞き取れる子もいる。

２　日中のハーフの子

次に多いのがこのケースだが，それぞれの家庭で事情は千差万別である。父親が日本人の場合，母親が日本人の場合，日系企業駐在員，現地企業や個人事業主，共働きの家庭などなど。子どもの言語環境も様々で，家庭では中国語で話す子も多い。入学前に現地系の幼稚園に通っていた場合，入学後，日本語に慣れるのに時間がかかる子もいる。まれに，現地の小学校に通っている子が日本語があまり話せない状態で小学部途中から編入を希望することもある。そ

の場合，何度も面接を重ね，授業についていけるか，学校生活に馴染めるかを判断する。

　中国語をネイティブに話せる子は，私が出会ったケースは全てハーフの子だったと記憶している。蘇州日本人学校は，中国語の授業の回数が多く，テストなどもあるだけでなく，現地校交流や文化体験など，中国語を使える行事が多い。そのため，そういう子たちは，毎年活躍の場を多く得ている。

３　中国以外の国と日本人のハーフの子

アメリカ，インドネシア，韓国，台湾などの方のハーフの子も，少ないが在籍していた。その中には，幼稚園は現地系，家庭では英語，日本人学校で日本語を学んだおかげで，低学年からネイティブに３か国語を話せる子もいた。逆に，ハーフであっても，日本でしか生活したことのない子の場合は，家庭でも日本語しか使っていないため，両親が日本人の子と変わらない状況の子もいた。

４　その他

例えば，「両親は中国国籍だが，本人は生まれてから日本にしか住んだことがない」といった事情の子もいた。入学条件の原則は「日本国籍を有すること」だが，運営委員会の判断次第で入学するケースもあったようである。

５　ハーフの子たちのグループ化

ハーフの子たちは，日本のテレビや芸能人の話題についていけない，食事や買い物の生活習慣が違うなどの場合があった。保護者の言語環境や生活環境の影響で，ハーフの子たち同士，家族ぐるみで仲良くなるケースも多かった。そうした場合，その子によっては，似た境遇の子としか付き合えなくなるようなタイプの子もいて，学級編成などの場面で配慮を要する場合があった。

(オ) 特色のある教育活動

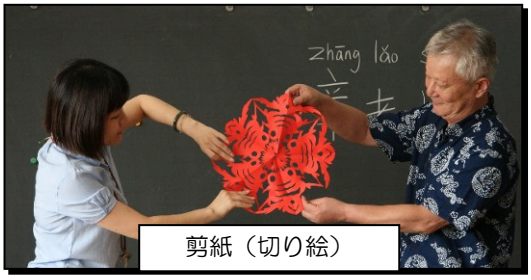
１　蘇州・中国文化体験

***a)*** 概要

蘇州日本人学校では，蘇州や中国の文化に触れることや，週１～２回実施している中国語の授業の実践の場を設けることを目的として，年に１回，「蘇州・中国文化体験」（以下，「文化体験」）を行っている。「文化体験」では，蘇州や中国の文化の中から，学年の発達段階に応じた内容を選び，講師の先生方をお招きしたり，施設を訪問したりして，実際にその文化を体験する（実際に実施した体験内容については，一覧表を参照）。中国に住んでいながら，きっかけがないと自分から触れる機会が意外と少ない子どもたちにとって，本物の文化に直に触れることのできる貴重な場となっている。また，「文化体験」は，例年，学校公開週間に行っており，参観する保護者の中には子どもの製作活動を手伝ったり，一緒に体験に参加したりする方もいる。

中国結

中国武術「五歩拳」



剪紙（切り絵）

蘇州・中国文化体験　内容一覧

| | H26 | H27 | H28 |
|---|---|---|---|
| 小１ | 切り絵 | 切り絵 | 切り絵 |
| 小２ | 昆劇鑑賞 | 武術体操 | 武術体操 |
| 小３ | 中国結 | 中国結 | 中国結 |
| 小４ | 昆劇鑑賞 | 昆劇鑑賞 | 中国結 |
| 小５ | 五歩拳 | 五歩拳 | 五歩拳 |
| 小６ | 昆劇鑑賞 | 昆劇鑑賞 | 中国茶芸 |
| 中１ | 水墨画 | 中国結 | 工場見学 |
| 中２ | 水墨画 | 工場見学 | 水墨画 |
| 中３ | 書道 | 書道 | 書道 |

２　現地校交流

***a)*** 概要

蘇州日本人学校では，コミュニケーション力や相互理解の素地を養うことを目的として，年に１回，現地校交流を行っている。学年，年度によって，現地の学校を訪問する場合と現地の児童生徒を招待する場合がある。

***b)*** 相手校との打ち合わせ

毎回，招待する方の学校が内容を企画し，打ち合わせを経て実施を迎えた。打ち合わせでは，中国語が堪能な事務局スタッフや，日本で教員免許を取得した，中国人の教員（中国語指導担当）が通訳として補佐してくれるため，言葉の不自由さはなかった。打ち合わせで相手校を訪問した際には，立派な校舎や体育館，資料館を案内して下さるなど，大変丁寧に応対していただいた。

***c)*** 交流内容

内容は，合唱や合奏，ダンス等の披露，学校案内や名刺交換等の個別交流，製作活動体験等の文化交流，綱引き，ドッジボールなどのスポーツ交流などを行った。

日本人学校としては，コミュニケーションを主体とした交流を行いたい思惑があるのだが，相手校はどちらかと言うと文化交流を中心に企画する傾向にあった。これは，国際理解教育に対する両国のスタンスの違いや，両校の中での本行事の位置付けの違い，そして，それらを摺り合わせするには少なすぎる交流の機会という事情もあり，このギャップはなかなか解消できなかった。

３　外国語

***a)*** 英語

蘇州日本人学校では，英語力の充実にも力を入れている。他の日本人学校に比べると，特別なことではないかもしれないが，小学部では，英語活動の授業を全学年で実施している。中学部では，英語の授業のほかに，英会話の授業を週２時間行い，より実践的な語学力を身につけさせようと取り組んでいる。小，中学部ともに，ネイティブの講師と日本人教員がチームで指導している。

また，英語検定を年に３回行っている。英語活動や英会話で身につけた表現や知識のレベルを把握し，将来につなげる機会となっている。同様に実施している漢字検定と共に，日本を離れた地で日本と同様の検定試験を受けられる機会は貴重であったと思う。ただし，試験監督については課題があった。各検定試験の試験監督は教員が行っていたが，英語検定の２次の面接試験を実施できる教員が限られていたため，その教員の休日出勤が増えてしまっていた。私の赴任していた期間は，たまたま英語科教員，検定資格のある教員が多かったが（本来英語教員だが，小学校担任・専科教員等にあたっていた教員が数名いた），中学部の規模を考えると，いつも英語科教員が何人もいるとは限らない。こういった人材が欲しいのは，他の日本人学校も同様であると思うので，この点は今後の課題である。

***b)*** 中国語

中国文化へのより深い理解と，コミュニケーション能力の定着を図るた

め，小学部１・２年生は週に１時間，小学部３年生から６年生は週に２時間の中国語の授業を行っている。小学部の中国語学習のレベルは，中国の日本人学校の中でも高い方だと言われていた。

３～６年生では，中国語のクラスを初心者向けのクラスからネイティブ向けのクラスまで，習熟度別に「櫻花」「百合」「菊花」「玫瑰」「牡丹」の５段階に分けて授業を行っている。編入したばかりの子は，初心者クラスでも，中国人講師が何を言っているか分からず，補佐の先生につきっきりになってもらうが，１か月もすれば補佐無しで授業を受けられるようになる。

地下鉄の駅名を知る学習

日本人家庭の子であっても，本人の努力があれば一番上のクラスに入れる子もいる。子どもの吸収力には驚かされるばかりである。

中学部は中国語会話として，希望者のみを対象に週１時間の放課後授業を行っている。

中国語文法や表現だけでなく，中国語の歌や習慣・風習などの中国文化も学んでいる。「端午節」「中秋節」「春節」などの中国ならではの祝日の由来や，それらに関連する食べ物，習慣などを知ることにより，自分が生活する蘇州や中国についての意識を高め，その学びを深める機会をつくっている。

４　仲良し班活動

蘇州日本人学校では，小学部，中学部併設である特長を生かし，縦割りの班活動である「仲良し班活動」を行っている。木曜日，始業前の朝の時間に，集団遊びなどの班活動を行ったり，年に数回，縦割り昼食会を実施したりし，交流を深めている。毎年，運動会では，仲良し班対抗の競技があり，互いの結束力を競い合っている。中学部２，３年生がリーダーとなり，リーダー会議などを通して，活動の企画，運営を行っている。

## ***3　中国文化に関わる実践・中国ならではの実践***

(ア) 蘇州・中国文化体験

１　国際交流委員長として

赴任２年目に，「文化体験」を担当する部署「国際交流委員会」の委員長として業務に当たらせていただいた。すでに軌道に乗っていた「文化体験」ではあったが，人の入れ替わりが多い学校事情，日本とは異なる中国社会の，それこそ「文化の違い」等の条件により，新たな授業内容を発掘する必要があった。本書では，いくつかの文化体験の内容とそのネタ探しの様子をご報告したい。

２　文化体験その１「五歩拳」

「五歩拳」とは，中国の武術の基本的な動きを含めた５つの型を連続で行う武術である。赴任１年目と３年目の２回，５年生の担任として授業に参加させていただいた。例年，講師の先生をお招きし，中国語の先生に通訳していただくので，担任としては補佐的なことしかできなかったが，たった２時間で児童は五歩拳をマスターし，大満足の文化体験だった。授業の最後に，中国武術

を使った護身術もご指導いただいた。

３　文化体験その２「中国結び」

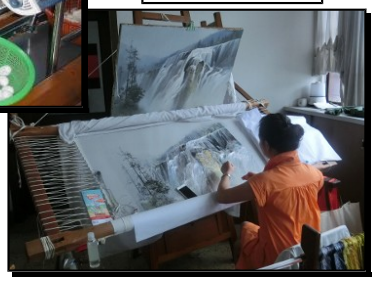
　中国結びとは，よく赤いひもを編んで作られるお守りのような飾りに代表される，中国の伝統工芸である。大人でも難しいような結い方もたくさんあるが，小学生が取り組んでも１～２時間程度で仕上がるような簡単な結い方も多くあるため，小学生の文化体験の教材としてはもってこいである。赴任２年目に３年生の担任として授業に参加させていただいたが，講師の先生をお招きし，書画カメラなどを使ってご指導いただいた。３年生は３学級あったため各学級２時間続きで時間を設定，そのうち１時間目に講師の先生に教わり，もう１時間でひらすら編むという形式で行った。３年生にはやや難しい内容ではあったが，学校公開週間で，保護者の方が多く来て下さったので，ほとんどの子が時間内に作品を完成させていた。

４　文化体験その３「シルク工場見学」

　国際交流委員長として文化体験の内容を増やすため，アイディアとしては以前から日本人学校にあった「シルク工場見学」を復活させることとなった。実際には，シルク工場だけでなく，実際に刺繍を製作している「刺繍研究所」とセットで見学する内容を考え，中学部や中国語の先生方に実践していただいた。

シルク工場

刺繍研究所



　幸い，シルク工場自体は職員研修で訪れていたため，再度下見に行った際に，拙い中国語を駆使して資料と連絡先をいただくことができた。また，絹の関連で，個人的に観光で訪問したことのある「刺繍研究所」にも見学に行ければと思い立ち，学年の先生と共に下見に行き，採用を決めた。「刺繍研究所」は蘇州の名物である刺繍を製作している様子だけでなく，１つ何百万～何千万円もするような高級な刺繍の作品を間近で見られる施設である。その後の連絡調整等は，さすがに中国語の先生を通して行っていただいたが，産業革命～租界時代を支えた産業と伝統文化の関連をセットで体験できるこの企画の実現は，「文化体験」の理念に一定の貢献ができたのではないかと思う。

５　文化体験その４「中国茶芸」

　H28 年度，諸事情により昆劇鑑賞の実施が難しくなることが分かっていたので，代わりに企画したのが，小学部６年生向けの「中国茶芸」である。中国では，生活の中にお茶を飲むことが，日本よりも深く根付いている。伝統的な作法や入れ方についても，日本人に人気の習い事であると共に，観光地やお茶の名産地では，見かけることがあり，「文化体験」のラインナップに加えておきたい内容だと考えた。

　中国のお茶の作法は，日本のそれとは全く異なり，例えば湯飲みが小さい，湯飲みを洗ったお湯をお盆に捨てるなど，子どもにとっても印象的であろう特長がある。小学部のクラブ活動である「中国文化クラブ」では，すでに中国茶体験の実績があった。しかし，クラブ活動での実践は，中国茶を味わうことを中心としていたため，家庭科でお茶の入れ方を学習した学年なら，中国茶の入れ方を教わると面白いのではと思い，企画を考えた。

アイディア自体は比較的容易に受け入れていただいたが，問題が１つあった。それは，中国茶の茶道具が日本人学校にないということだった。講師の先生にお願いして用意していただくことも考えたが，中国にある日本人学校に，中国茶の道具が揃っていないのは残念なことだという思いもあったため，各方面に働きかけることにした。

文化体験の様子

景徳鎮の茶器（上）と学校で購入した茶器（下）

授業で使うとなれば，茶道具のセットが最低６セットは欲しい。まずは蘇州，上海のお茶市場で道具の価格を調べ，H27 年 10 月，学校に予算申請をした。実際に購入する際も，実物を見て決めたかったので，通販や業者を通すことは避け，品数豊富な上海の市場で茶器セット（蓋椀，茶杯，茶海，茶漏），茶盤，茶托，茶挟，茶杯入れを購入した。その後，講師の先生に見ていただき，足りなかった賞茶荷を購入した。上海までバスで赴き，３名で６セットの茶道具を運ぶのは大変だったが，購入金額は合計 1050 元（当時 17000 円程度）で抑えられたし，自身としても市場で茶道具を買うなどという貴重な経験をさせていただき，とても印象に残っている。

６　今後の課題

鑑賞学年の重複を避けるためにH28 年度は実施を見送った昆劇鑑賞だったが，税制度の変更，観賞場所の制限等の条件から，実施を続けることは難しいかもしれないという状況で，私は赴任を終えた。昆劇鑑賞ができなくなるとしたら残念なことである。代わりに，世界遺産に登録されている蘇州の庭園で写生会をしてはどうかと代替案を伝え，今年度はそのアイディアを取り入れていただいたと聞いている。今後も，新たな文化体験のネタの発掘は，継続的に担当者が行っていかなければならないと考える。

(イ)中国文化クラブ

１　概要

蘇州日本人学校小学部のクラブ活動に，「中国文化クラブ」がある。その名の通り，中国の文化を体験するクラブである。例年，現地での生活が長い先生や中国語が堪能な先生が担当し，１年を通して二胡の演奏を学んだり，中国人の講師や大学生をお招きして，中国の文化を教わったりしている。しかしどういうわけか，赴任３年目，中国に関して素人の私にポストが回ってきた。

中国語も片言しか話せず，中国文化にも対して詳しくない私は，それでもなんとか入ってきた子どもたちをがっかりさせないようにと思い，前任の先生の実践を土台として，次のような活動を行った。

２　実践その１「中国結び」

中国結びで作ったリース

前任の先生の実践を引き継ぎ，講師の先生をお招きしてご指導いただいた。「文化体験」では３年生で中国結びを行うので，講師の先生には違う結い方を，とお願いした。講師の先生は，中国の方だが日本語が堪能なため，とても助かった。４５分の授業時間はやや短かったが，クラブは４年生以上であるので，できなかった分は持って帰って作らせた。

３　実践その２「切り絵」

切り絵は，中国の観光地でのお土産の定番である。切り絵自体は多くの国にあると思うが，技術の高さと生活への定着度では中国が一番であろう。クラブの授業としては，単に「切り絵」をするのでは，中国らしさが出ないので，中国だからこそできるということ，中国の文化から学んだということの実感が得られるように配慮した。型紙を中国の現地で購入した本をコピーして使ったのだが，中国の切り絵の本も今ではグローバル化して中国らしくないデザインも多い。従って，実際に指導する際には，入口はできるだけ中国らしい型紙を用意し，そこから発展させるようにした。また，現地で伝統的な切り絵用のはさみを購入して使用させたが，さすが専用の道具は使い勝手が良く，そこでも中国らしさを体験できたと思う。

４　実践その３「はんこ作り」

はんこ作りの様子

中国の判子（はんこ）と言えば，「篆刻（てんこく）」が有名である。しかし，篆刻は小学生にはやや難しい。また，蘇州日本人学校では，中学部の美術のカリキュラムにも組み込まれている。そのため，前任の先生は，５cm 角のゴム印用のゴムを用意し，通常の彫刻刀で判子を作らせていた。私もそれにならってゴム印を使ったのだが，単に判子を作るのでは篆刻との関連が薄いと考え，判子は氏名印，字体は中国古来の字体に限定することとした。

インターネット上には，現在使われている漢字を中国古来の字体に直してくれるサイトがある。それを利用し，休み時間に子どもたちに字体を選ばせ，全員の氏名を旧字体で，一辺５cm の正方形の大きさで下絵を作ってあげた。クラブの授業時間の作業は，下絵を写すところから三角刀で線彫りするところまで，ほとんどの子が４５分で完成できていた。字体や画数にもよるが，たいていの子なら，彫刻刀初体験でも，６０分あれば終えられる内容で，クラブ活動にはちょうどよい内容だった。

５　実践その４「中国茶」

これも，前任の先生が考えて下さった内容を踏襲した。講師（中国結びと同じ先生）をお招きし，中国の様々な種類のお茶（緑茶，紅茶，青茶（烏龍茶など），白茶，黒茶，黄茶）を味わうことを中心に，淹れ方などもご披露していただいた。日本茶と比べ，種類による味の違いがはっきりしており，小学生でも好みを区別することが容易なため，小学生向けの教材としてとても優れていると感じた。

６　実践その５「中国象棋（将棋）」

中国の象棋は，日本の将棋とはルールが全く違うので，駒の動かし方を短時間で覚えさせるのは無理である。そこで，実物の象棋の道具だけでなく，学校備品であるiPadに中国象棋のアプリをダウンロードして用意した。アプリなら，間違った駒の動かし方ができないので，日本の将棋ができない子でもすぐに楽しむことができた。

(ウ)まち探検

１　概要

赴任２年目（H27）に小学部３年生の担任をした際に，社会科の学習で「まち探検」を行った。日本の学校とは交通事情などが異なり，蘇州日本人学校では，２年生の「まち探検」は最近では行っていないため，子どもたちにとっては初めての「まち探検」となった。

例年，５～６月あたりに２回行っている。H27年は，１回目は街の様子の観察を中心に行い，２回目は近所の市場の見学と，シャングリラホテルの上層階から学校周辺を観察することを行った。

２　獅山市場

***a)*** 概要

獅山農貿市場（通称，獅山市場）は，学校から１kmほどの位置にある，全くの現地の市場である。日本ではなかなか見かけることのない昔ながらの食品中心の市場で，もちろん日本語は通じない。前述のとおり，日本人学校の保護者の多くは，日系のスーパーを利用しているため，近所とはいっても，行ったことのない子がほとんどである。

市場見学の様子

***b)*** 見学の許可

全くのローカルな市場であるため，見学許可を得るのも試行錯誤の連続だった。まずは連絡先が分からなかったため，拙い中国語で老板（社長・店長）が誰かを尋ね，老板らしき人に，とにかく笑顔で自己紹介。携帯電話の番号を教えていただいた。そして学校にもどり，中国人教員にお願いして，電話で見学の依頼をしてもらった。お店の方にも老板にも，とても好意的に，親切にしていただいて助かった。

***c)*** いざ見学へ

実際の見学の際には，中国人教員や担任外の教員にも引率に加わってもらい，後述のとおり保護者の方にもご協力をいただいたため，市場内ではグループ毎の自由行動を行った。各学級内で４人程度のグループを作り，中国語が話せる子をできるだけばらして配置。中国語の授業時間等を使って事前に考えておいた内容を中国語で質問した。各学級に数人ずついた中国語ネイティブの子は，答えを正確に聞き取り，その子によっては一言二言会話を交わすなど，大活躍であった。普段買い物しているお店との違いに驚いたり，「一番好きな野菜は何ですか？」→「茭白（マコモダケ）です」など，意外な答えが返ってきたりと，新鮮な発見が多かった見学だった。

３　シャングリラホテル

学校から１ kmほどの位置にある，日系企業の駐在員も住んでいる五つ星ホテル。H27当時は，営業担当の方が日本人の方であったため，依頼，打ち合わせ等は大変スムーズに進んだ。

当日は，４８階にある展望レストランにお邪魔し，学校周辺の様子を上空から観察した。子どもたちも高層マンションに住んでいる子はいるが，シャングリラホテルは，その中でも高い方だったので，とてもよい経験となった。

４　保護者の協力

日本とは交通事情が異なり，緊急の場合の対処も難しいという状況の中で，H27の「まち探検」では，保護者の方に協力を依頼した。探検について来て下さる保護者ボランティアを募集したところ，児童２人に対して保護者１名程度の方が協力してくださった。おかげで，特に大きなトラブルもなく，無事に終えることができた。家庭訪問がない中で，１学期は保護者の方との交流があまりなかったため，そういった意味でも貴重な機会となった。

５　コマを回すおじさん

休憩中の公園で，偶然，コマを回しているおじさんがいた。中国のコマ「陀螺」には，健康器具として使われる大きな物があり，それを回していたのである。健康器具の「陀螺」は，鞭を振るっていつまでも回し続ける物なので，子どもたちも興味津々で周りに集まった。喜ぶ子どもたちに，おじさんは鞭を振らせてくれたが，なかなか上手くは回せなかった。しかし，普段現地の人との交流が少ない，日本人学校の大半の児童には，なかなか味わうことのできない貴重な経験となった。

６　現地の人との交流

学級に，中国人の父を持つ女の子がいた。その子は普段から親戚を相手に中国語を話しており，家庭教師にも教わっていて，もちろん中国語のクラスも最上級の「牡丹」。その子が休憩中，知らないおばさんと中国語で世間話をしていた。当時，現地の方の中国語はほとんど理解できなかった私がどんな話をしたのか尋ねると，学校のことや「まち探検」のことを話したそうである。

小学３年生が，知らないおばさんと世間話をするだけで驚きだが，それを中国語で話せるなんて，本当に驚いた。この仕事をしていると，子どもの能力に驚かされることは多いが，赴任の３年の間，日本人学校の子に一番多く驚かされたのは，こうした中国語の能力である。また同時に，こうした能力の高い子どもや保護者が，数あるインター校や現地の進学校ではなく日本人学校を選んでくれているということに誇りを感じ，自分の身も引き締まる思いがした。

(エ) 太極拳（運動会表現種目：太極扇「中国功夫」）

１　概要

赴任２年目（H27）に小学部３年生の担任をした際に，運動会の表現運動で何をするか，中学年の先生方で考えた。当時，小学部高学年は組み体操，中学部は南中ソーランという定番演目があったが，低・中学年は，毎年新しい曲でリズムダンスをする流れだった。しかし，中学年のリズムは難しい。かわいさでは低学年に勝てないし，低学年よりも成長した姿を見せられる内容でなければならない。もちろん，曲選びの困難もある。

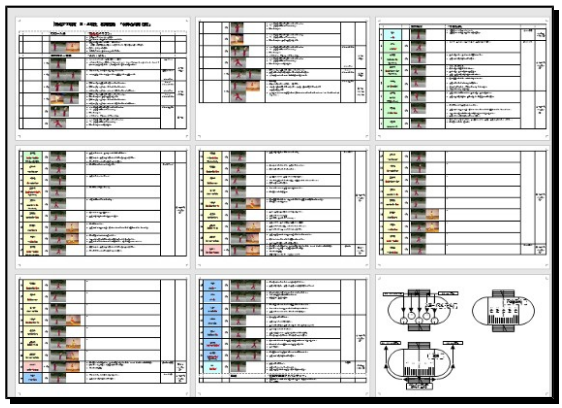
そうした中で担任団が悩む中，高学年のある先生が，「中国功夫」の曲に合

わせて踊る，扇子を使った太極拳の映像を見せてくれた。動きはやや難しい。手本も動画（中国の動画サイト「优酷（youku）」に公開されている動画がいくつか）しかない。扇子の調達の問題もある。しかし，組み体操やソーランとテーマが被らず，何よりも中国らしく，成功すれば，中学年の定番演目にできるかもしれない。そう話し合い，太極扇「中国功夫」に挑戦することとなった

２　演技指導の準備

まずは教員が踊れなければ話にならない。しかし，通常の表現種目のように指導書もなければ振付図もない。自分で振りを考える難しさはないものの，経験のない太極拳の動きを，動画を見るだけで身につけるのは難しかった。

動画も，前向き，後ろ向きなどいくつかのものがあったので，中から真似しやすいものを選んだ。そしてまずは自分が真似して覚える。３年生には難しい部分は簡単な振りにアレンジする。それを写真入りの振付表兼演技構成表にする。とりあえず教員用の扇子だけは自費で取り寄せ，表をもとに，教員５人で連日練習。教員が踊れるようになったところで，何とか３年生でも踊れそうだという結論になり，正式に Go サインが出た。



「中国功夫」演技構成表

３　扇子の購入

扇子は，中国最大手の通販サイト「淘宝（タオバオ）」で購入することになった。扇子の準備は４年生の先生が受け持ってくれた。大きさなど，数タイプがあったので，１つずつ取り寄せ，大人用を使うことに決定。１本 150～200 円程度の扇子でも，子ども 100 人分となると予算オーバーだったが，他学年で余る分を回していただき，なんとか購入。届いたのは運動会１か月前で，ギリギリ間に合いそうだった。

扇子が届く前にも，児童への演技指導を行っていたのだが，届いた後はモチベーションが数段上がった。扇子の使い心地は，この演目の成功の大きな要因の一つと言える。私見ではあるが，この太極扇用の扇子の表現種目の小道具としての優秀さは，よさこいソーランの「鳴子」並みであると思う。

製品の問題としては，扇子の文字どおり「要」の部分の細いボルトが外れやすいことがあった。付属の予備部品では足りなくなりそうだったので，地図アプリ「百度地図」で金物屋を検索，１軒１軒訪れてねじ専門店を発見，実物を見せて大量購入した。日本のホームセンターに当たる小売店がない中国では，思わぬ苦労が伴った。

定番演目となれば上級生が下級生に手本を見せられるが，最初の年はそうはいかない。２学年合同体育で，順々に指導していった。また，各学級でダンスリーダーを５名ずつ選び，その子たちは他の子よりもたくさん練習し，早く覚える一方で，本番では一番目立つ最前列で長く踊れるという特典をつけた。上手い子が前にいれば，後ろの子たちが踊りやすいだろうという計算もあった。

蘇州日本人学校は，H27 年度から，小学部では各学級に電子黒板を設置した。その電子黒板をフル活用して練習した。各学級の電子黒板

に動画のデータを入れておき，業間休みのたびに流してもらっただけでなく，昼休みは電子黒板をホールに移動してダンスリーダー練習＋自主練習を連日行った。７０インチの大きな画面は，２学年合同の体育の授業の際にも活用でき，非常に助かった。

４　成果

「中国功夫」の曲に加えて入場に「燃えよドラゴン」のメインテーマ，１曲目に「キル・ビル」の「Battle Without Honor Or Humanity」，退場には「ドラゴン・ボール」の「摩訶不思議アドベンチャー」を採用し，本番の演技は大好評を博して大成功で終えた。観客からの評判もよく，中国政府の方からも好評だったようである。何より子どもたちがこの太極扇を気に入ってくれ，運動会が終わってからも教室で動画を流して踊ったり，家庭で家族に披露したりと大満足の様子だった。

５　課題

赴任３年目，私は中学年を離れたが，この「中国功夫」を定番として引き継いでくれた。日本の学校では，低・中学年の表現種目がよさこいソーランなどの定番演目である学校も多いと思う。しかし，それまで毎年新しい演目を行ってきた日本人学校では，特に新４年生の児童や保護者から，同じ演目を２年連続で行うことへの不満はあったようだ。

もちろん，毎年新しい事に挑戦できたらいいのかもしれない。しかし，蘇州日本人学校では，運動会の練習時間が通常の体育の授業時数を圧迫している状況があった。重ねて，毎年教員が３分の１入れ替わる中で，赴任直後の４～５６月に，十分な教材が手に入らない中で表現種目の内容を考えなければならない困難さもある。太極扇「中国功夫」は，蘇州日本人学校のカリキュラムの課題を少しだけでも解消でき，中国の文化を知ることができ，しかも子どもが演じて楽しく思い出にも残る。教材としてとても優秀な演目であると考える

それでも，２年目となると飽きてしまう子も出るかもしれない。今後の課題としては，新４年生のモチベーションを高めることであると思う。上級生の自覚を持ち，下級生に教えることに新たな喜びを見いだせるように指導することが必要である。

６　日本の学校で生かせるか

中国でなら 200 円で買える扇子も，日本で買おうとすると 1000 円近くする。日本の学校でも実践することを視野に入れ，扇子を 100 本ほど大量購入して帰ろうかとも考えたが，さすがにそれはやめ，結局クラブ活動程度の規模を想定し，30 本ほど購入した。太極扇は，扇子さえ手に入れば，日本の学校でも十分に実践できる演目であると思う。難しさもあるが，扇子を振った時の気持ちよさと技が決まった時のかっこよさは，子どもたちが必ず好きになる演目である。

## 4　中国生活・イメージと違ったところ

ここからは，学校生活・業務とは離れ。中国生活についてご報告したい。一日本人の偏った意見もあると思うが，楽しかった中国生活を少しでもお伝えできればと思い書いたので，肩の力を抜いてお読みいただければと思う。

(ア)中国のお茶について

１　豊富なお茶の種類

中国に行く前は，「日本は緑茶，西洋は紅茶，中国のお茶と言えば烏龍茶」と思っていたが，それは全くの誤りであった。中国には緑茶も紅茶もある。それどころか，「緑茶，紅茶，青茶（烏龍茶など），白茶，黒茶（プーアル茶など），黄茶」の６種に大別される，非常に豊富な種類のお茶が市井に溢れており，街のお茶市場などに行くと，カラフルな茶葉と芳醇な香りに圧倒される。また，お茶の種類による味の違いもはっきりしており，お茶屋さんで様々なお茶を振る舞ってもらうのは，味音痴の私でもとても楽しい。

２　一日中お茶を飲む国民

これはよく知られたことだが，中国の方は一日中お茶を飲む。各々がお茶用の水筒を持ち歩き，朝入れた茶葉にお湯を注ぎ足して何度も飲む。そのため，バスターミナルや駅，空港，列車の中には無料の給湯所があり，蛇口をひねればすぐにお茶が淹れられる状況にある。

３　ペットボトルのお茶は甘い

中国でもコンビニなどの各店舗でペットボトル入りのお茶も買える。しかし，なぜかペットボトル入りのお茶は，ほとんどが甘い。ちなみに中国の方がお湯で淹れるお茶は，普通は砂糖を入れない。私の知る限りでは，甘くないお茶のペットボトル入りを出しているメーカーは３つしかなく，それらのお茶も小さな店や地方の店に行くと売られていないことが多い。「旅先で喉が渇いて売店に立ち寄る際に，まず探すのが甘くないお茶」というのは，「中国に住む日本人あるある」であると思う。私見だが，これは，「甘くないお茶は自分で淹れるから買わない」からなのではないかと思うがどうだろうか。最近では，徐々に甘くないお茶のペットボトルも増えてきている印象である。

(イ)中華料理

１　辛い

中国の中華料理は，日本国内のそれとは別物である。一番感じたのが，辛い料理が非常に多いことである。

***a)*** 中国の方の「辛くない」は信用できない

辛い料理が苦手な妻は，辛い料理に警戒し，味の想像がつかないものを注文する際には，「辣不辣？」（辛いの？辛くないの？）と聞いていた。しかし，答えが「不辣」（辛くない）であっても辛い料理が出てきたことがたびたびあった。中国の方は辛い料理が好きなため，辛さの基準が違うのであろう。

***b)*** 「辛い」にも２種類ある

中国には，辛さの表現が２つある。「辣」と「麻」である。「辣」は唐辛子のような辛さで日本人にも馴染みのある辛さ。「麻」は花椒（フアージャオ）などの痺れる辛さである。私は「辣」はある程度食べられるが，この「麻」がやや苦手だった。

*c)* 「辛い」以外に日本人が苦手な味

その他にも，日本人の中には，コンビニなどに漂う八角の香り，幅広い料理に使われるパクチー，羊肉など西方の料理に多く使われるクミン，甘いソーセージなどが苦手だと言う人が多いようである。特にパクチーは，中華料理に使われるイメージがあまりないようで，意外だとおっしゃる方が多い。

２　日本の中華料理とイメージが違った物

*a)* 麻婆豆腐

日本で中華料理の代表と言えば麻婆豆腐であろう。しかし，中国では，この麻婆豆腐を出している店は意外と少ない。味は，日本と同様な物もあれば，「麻」や激辛の物など，千差万別である。

*b)* 回鍋肉

回鍋肉と言えば，「キャベツと豚肉の甘味噌炒め」だと思っていたが，中国の回鍋肉は違った。まず，キャベツが入っている回鍋肉は，３年間で一度も出会わなかった。たいていピーマンかタマネギが入っていて，場合によっては結構辛い。

*c)* 青椒肉絲

青椒とはピーマン，肉絲とは肉の細切りのことなので，見た目は日本の物と同じ物が出てくる。しかし違うのは，ピーマンが辛いことがあることである。場合によっては唐辛子並みに辛いので要注意である。

*d)* エビチリ

私があまり高級店に入らなかったせいか，３年間でエビチリらしき料理に出会うことはなかった。

*e)* 餃子

日本で餃子と言えば圧倒的に焼餃子が多いが，中国では違う。むしろ焼餃子を出す店は蘇州では少なく，水餃子や蒸し餃子が一般的であった。ちなみに焼餃子は，餃子ではなく「鍋貼」と呼ばれることが多い。

３　珍味

中国の方にとっては普通の物でも，日本人にとっては珍しい食べ物もたくさんある。３年間での私の挑戦の一部を紹介したい

*a)* ザリガニ

毎年夏が近づくと，街の料理屋さんの前にたらいが置かれ，大量のザリガニが入れられる。味はエビの類なので美味しいが，殻をむくのが面倒。

*b)* タニシ

これも，貝の類の味なのだが，たまにタニシの子どもが入っているのがある。それさえ嫌でなければ美味しく頂ける。

*c)* カブトガニ

南方で食べられる高級食材。食べる部分は少ないが濃厚。カニ味噌を食べる感覚に近いか。

*d)* 何かの幼虫

屋台で売られていた串焼きに挑戦した。甘くてほんのりと苦く，先入観がなければ美味しく頂ける。

*e)* 臭豆腐

売っている時の臭いがきついため，敬遠する日本人が多いが，食べてみるとほとんど臭味はない。固い揚げ豆腐にソースを付けて食べる感覚。小腹が空いた時に歩きながら食べる，中国では一般的なファストフード。

４　ドリンク屋

どの街にもたいてい，タピオカ入りミルクティや果実茶が売られているドリンク屋さんがあった。お茶の種類が豊富なだけでなく，トッピングも黒・白タピオカ，ナタデココ，パッションフルーツ，アロエ，ザクロなどのツブツブ系だけでなく，プリンや仙草ゼリーなども入れられる店もある。

５　蘭州ラーメン

中国全国，どの街に行っても必ず見かけたのが川菜（四川料理）の店と蘭州ラーメンの店である。四川料理の人気は想像しやすいが，この蘭州ラーメンという物を私は知らなかったため，とても意外だった。蘭州ラーメンは文字どおり甘粛省の蘭州名物のラーメンであるが，実際の店は甘粛省だけでなく，ウイグルや寧夏など西方出身のイスラム教徒の方が出していることが多かったように思う。蘭州ラーメンの定番「牛肉面（麺）」は，白い麺とスープに緑のパクチー，赤い辣椒（唐辛子入りの調味料）の３色で鮮やかに彩られているのが特徴。日本のラーメンのおいしさとは違ったベクトルだが，私はこれが大変気に入って，３年間食べ続けた。

６　その他気に入った料理

*a)* 蘇州面（麺）

蘇州名物の，甘い味付けのラーメン。前述のとおり，中国人の中には苦手にする人も多いようだが，日本人には親しみやすい味なのではないかと思う。蘇州など江南地方以外ではほとんど見かけなかった。

甕（かめ）入りの紹興酒

*b)* 紹興酒

蘇州のお隣，浙江省の紹興市で作られる黄酒。日本で飲む紹興酒とは明らかに違った種の飲み物で，先入観が覆された。紹興では味見しながら量り売りで買うことができ，紹興出身の魯迅ゆかりの観光地と共に街の名物である。

紹興酒の量り売り

*c)* 上海蟹

前述のとおり，本来は「蘇州蟹」とでも言うべきカニである。北海道で美味しい毛ガニを食べたことのある方には，どこを食べるのかと思われるかもしれないほど食べるところが少ない。上海蟹の一番の楽しみは，カニ味噌である。蘇州では，秋が上海蟹シーズンである。シーズンになると比較的大きなカニが安く食べられるようになる。雄と雌の味噌は味がはっきり違うので，１人で２匹注文する人も多い。高いし食べるところも少ないのだが，季節を楽しむ料理として，街の風物詩として味わう類のものかと思う。

上海蟹を紹興酒に漬けた「酔っ払い蟹」も絶品で，こちらは市内ショッピングモールのフードコートで売っている店があり，むしろ気軽に食べられた。一度，中国の方に「酔っ払い蟹」の漬け方を教わったが，実践できずに終わった。

***d)*** 羊肉串（シシカバブ）

蘭州ラーメンとともに，西方料理の代名詞。クミンで味付けしてあるのが特徴的。

***e)*** ピータン

スーパーなどで普通に売られている。殻の周りの泥付きを買うとゴミがたくさん出る。

(ウ) トランプ好き

１　公園に集まって

中国の方が，麻雀と並んでトランプも好きだと言うことを，赴任してみて初めて知った。公園やちょっとした空き地にご高齢の方を中心として集まり，トランプをしている光景をよく見かけた。ゲームはどうやら日本の「大富豪」に似たゲームで，「大地主」というものらしい。蘇州近辺では，トランプを２組使って 100 枚以上で行うルールもあるそうだ。中には，蘇州の世界遺産の庭園に高齢者特例で無料で入場し，東屋を陣取ってトランプに興じる方もいらっしゃった。

２　各地方の観光地で

国民がトランプ好きなため，各観光地のお土産屋さんでは，各地の特色あるトランプがよく売られていた。私自身，赴任以前からトランプ集めが趣味の一つだったため，旅行に行ってはトランプを数組買って帰ってきて，帰国の際には数十組コレクションを増やすことができた。

(エ) 交通事情

１　自転車

中国と言えば「通勤時間は自転車で渋滞」という何十年も前の映像のイメージだったが，全く状況は異なっていた。

***a)*** 電動自転車

蘇州の一般市民の足は，バスと地下鉄，そして電動自転車（蘇州の日本人社会では略して「電バイ」）である。電動自転車と言っても，日本で利用されている電動アシスト自転車ではない。型も様々だが，基本は電気で走る自転車である。日本のスクーターを電動にしたようなものもあれば，ペダルがついた自転車にそのままモーターを付けたようなものもある。

大きな道路には必ずと言っていいほど自転車専用レーンがあり，通勤時

間には電動自転車で渋滞していた。雨が凌げる屋根付きの電バイや，電バイ専用の合羽，風よけの防寒着なども売られていた。冬になると上着を前後逆に着て電バイに乗るのも見慣れた風景である。

*b)* 公共自転車

街の各所に公共自転車置き場が設けられ，カードをかざすだけで自転車に乗れるシステムが，中国全土の都市にあった。蘇州の場合，最初に5000円ほどのデポジットを払い，あとは１時間以内なら無料で乗れるシステムで，外国人の登録も可能なため，教員の多くが通勤等で利用していた。「良い自転車を見分ける方法」や「あの時間にあの場所に行っても自転車がない」といった話題は「公共自転車あるある」である。

*c)* 自転車シェアビジネス

最近，上海などの大都市でよく見かけるようになったのが，自転車シェアである。これはスマホのアプリと連動させてバーコードを読み取ることで，低料金で自転車に乗れるシステムで，自転車置き場でなくても乗り捨て可能な点が便利である。しかし，自転車の迷惑放置や，自宅付近に置いて私物化するなどの問題が起き，規制が始まるそうである。

２　地下鉄

蘇州では３路線，上海では１４路線，全国で20都市以上で地下鉄が運行されている（中国の地下鉄事情は日進月歩なので，最新情報をご確認のこと）。空港に直結している都市も多く，都市内の移動は，外国人にとっても非常に便利になってきている。一方で，地下鉄のカードに都市間の互換性がない乗る際に荷物チェックがあるなど，日本に比べて不便な点もある。

３　鉄道

中国の新幹線の路線も，今となっては大都市間を網の目のように張り巡らされている。蘇州ー上海などの近距離人気路線は１時間に数本と数も非常に多い。時間と料金は，蘇州ー上海で３０～４０分・約４０元（１元≒１７円），上海ー北京なら５～６時間・約５５０元と，日本より安め。全席指定席のため長距離で運行本数が少ないと，人気時期は予約が難しい場合もある。

在来線は，時間はかかるが非常に安い。また，上海ー成都間など超長距離路線の寝台列車などもある。寝台列車は，日本ではすでにレジャーとしての機能に移行している印象だが，中国ではまだまだ現役の移動手段である。寝台列車では乗務員さんが目的地前で起こしてくれる，充電ができる，お湯が使えるなどのサービスもあり，結構快適である。中にはWi-Fiが使える車両もある。

チケットはインターネット経由で予約できる。駅や街の窓口よりもネットの方が数日早く発売されるため，人気チケットはネットでないととれない。

４　バス

*a)* 路線バス

どの街にもバス路線が網の目のように張り巡らされ，たいてい１～２元程度で乗ることができる。待ち時間も１０～２０分程度が一般的で，慣れれば非常に便利な交通手段である。当初は乗ることに不安もあったが，停留所名を表示してくれたり，アプリで路線を検索できたりといった便利さも分かってきたので，旅行中もタクシーよりも多く使っていた。

*b)* 中長距離バス

各都市にあるバスターミナルから，各路線が出ている。料金はもちろん距離によって違うが，総じて他の交通手段より安いことが多いため，庶民の足として大活躍である。こちらも，チケットをネットで購入できる。

５　タクシー

都市によって異なるが，初乗り８～１５元程度。上手く使えれば便利だが，通勤時間には捕まらない，行き先を聞き取ってもらえないなど不便な場合もある。評判で聞いたよりは少なかったが，不正タクシーもいるので注意が必要。

(オ) スマホ，アプリの普及

中国では，ここ数年で，おそらく日本以上の勢いでスマホが普及している。中国人はとてもスマホが好きな国民であると思う。本体価格は，海外製品だと高いが，国内製品も増えている。利用料金が，日本と比べると非常に安く，これも普及の要因であると思われる。

１　動画サイト

有料・無料の様々なサイトやアプリがある。通勤電車内では，そこら中の人が動画を見ている。映画１本分をダウンロードしておいて，列車や飛行機で観るなどというタイプの利用者も，日本よりも多いような印象である。

２　地図アプリ

有名な「百度地図」などのアプリがあり，バスの路線や近くの施設の検索，ナビなど多様な機能がついている。これがあれば，初めての街でも迷わずにバスに乗れるというくらい親切。タクシーや企業等の運転手さんの中には，アプリをカーナビ代わりにしている人も多い。

３　通販

最大手の通販サイト「淘宝」を始め，多くのアプリが使われている。中国は国土が広く国内需要が大きい反面，国内都市で産業が分業されている一面もある。必要な物が近所では手に入らないことが多いため，通販アプリ・サイトは非常に重宝した。中国の物ならありとあらゆる物が手に入り，比較的安い。場合によっては海外製品も買える。学校の予算申請の際も，「淘宝で注文する場合･･･」という項目もあった。

４　宅配

中国では，レストランやファストフード店など飲食店の商品の宅配を専門に請け負う「外卖」（外売）という種の業者があった。もちろん日本と同様に飲食店自身が「外卖」を行う場合もあるが，街でよく見かけるのは，「外卖」を専門に行っている業者である。ドリンク店やファストフードで買い物をしていると，「外卖」の方が大量に購入し，急いで去る場面によく出くわした。その注文をアプリで手軽に行えるらしく，急成長産業の一つであった。

５　タクシー

タクシーを呼べるアプリもあった。また，タクシーではなく，登録している一般人の中で行き先が一致した人を呼び出し，低料金で乗せてもらえるシステムもあるらしい。